

Title	二〇二〇年度修士論文要旨；二〇二〇年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2021
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.1 (2021. 9) ,p.113 (113)- 127 (127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20210900-0113">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20210900-0113</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔日本史学専攻〕

## 戦国期伊達氏における対外交渉

坂下 佳祐

本論文は、戦国期伊達氏家臣が戦国大名間の交渉において果たした役割を検討したものである。伊達氏家臣の活動について、先行研究では伊達政宗期の片倉景綱の立場に関する検討や、輝宗期に「一家」「一族」に位置づけられている家臣の検討が行われてきた。しかし、輝宗期に外交の中心であったとされる遠藤基信が果たした役割は必ずしも明確ではない。主に伊達輝宗期を対象に外交担当である外交取次に注目して、伊達氏の対外交渉について考察を行った。

第一章では、輝宗期における南奥以外の大名との外交を検討した。従来、元龜の変における伊達家重臣中野宗時の失脚と前後して輝宗は遠藤基信を登用したとされてきた。これに対して越後上杉氏との交渉を題材に取り上げ、永祿年間には既に基信が輝宗のもとで外交に関与していたことを明らかにした。また、元龜の変後には基信が上杉氏との取次を独占的に担う傾向にあることを指摘した。天正年間に輝宗は織田氏や小田原北条氏と

友好的関係を形成しており、その取次も基信が独占的に務めている。他の戦国大名では主に当主一門が遠国大名との交渉を行うという指摘があるが、輝宗期の伊達氏にはそのような傾向は見出せない。

第二章では、輝宗期を通じて同盟関係にあった会津蘆名氏との交渉を取り上げた。同盟を締結した輝宗政権初期には伊達家重臣牧野久仲が取次を務めていたが、元龜の変後に遠藤基信が取次として登場し、同盟関係の継続を確認する際にも交渉に携わったことを指摘した。和睦調停の交渉などでは基信以外の宿老も蘆名氏や最上氏との交渉に関与したことを確認した。また、蘆名氏側の取次についても検討を行い、蘆名盛隆の時期に一門・宿老層と側近層の組み合わせで取次を形成していたことを指摘した。養父蘆名盛氏の死去と前後して外交関係の強化や交渉の円滑化がはかられたものと考えられる。

第三章では、輝宗期における当主親類の外交活動について検討した。有力一門である伊達実元は二本松畠山氏・蘆名氏・石川氏の交渉に関与している。これは実元が仙道諸氏と近接する信夫大森城を拠点としたことによる地理的条件が大きいと考えられ、杉目城に隠居した伊達晴宗にも同様の傾向を指摘できる。実元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。そのなかで軍事的には従属しながらも独立性を維持する「旗下」「郡主」に位置付けられている留守政景と亘理元宗を取り上げ、両者ともに地理的条件を背景に近接する他氏と外交関係を結んでいることを指摘した。それに加えて元宗は当主親類として交

渉内容を保証する役割をも担っていたと考えられる。

以上の検討から、伊達氏との間に友好的関係を形成するにとどまった遠国大名との交渉は、基信が取次を独占する傾向があったのに対し、和陸交渉や仲裁交渉が多く見られる南奥諸氏との交渉では、基信ら宿老と当主親類・旗下などが重層的に取次を担っていたことを指摘した。

#### 〔東洋史学専攻〕

### 嘉禾吏民田家蒞の作成主体について

住谷 広太

一九九六年に湖南省長沙市で出土した長沙走馬楼呉簡には、「嘉禾吏民田家蒞」と通称される二五四枚の賦税類大木簡が含まれている。嘉禾吏民田家蒞は他に類を見ない形状や書式を備えているために注目を集めてきたものの、その作成主体は未だ明らかでなく、作成主体を郷吏とする説と県吏とする説の二説が唱えられてきた。本論文は、嘉禾吏民田家蒞の各木簡の属する郷を推定することを通じて、嘉禾吏民田家蒞の作成主体について論じた。

第一章では、嘉禾吏民田家蒞の各木簡の属する郷の推定の準備として、長沙走馬楼呉簡に含まれている吏民の賦税納入の情報を記録した小型竹簡、所謂「賦税納入簡」に言及した。賦税

納入簡は郷と吏民の居住地である「丘」との間の何らかの対応関係を示すと考えられてきたものの、その対応関係の意味は未だ明確でなかった。本論文は、賦税納入簡は丘毎の吏民の戸籍登録先の郷の傾向を示していると述べた。

第二章では、嘉禾吏民田家蒞の各木簡の属する郷を推定した。まず、嘉禾吏民田家蒞の各木簡に記載された文言には複数のパターンがあることを示し、そのパターンに基づいて嘉禾吏民田家蒞を複数のグループに分類した。続いて、グループ毎に木簡に記載された丘が特定の郷と対応する傾向があることを示し、その対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷だと述べた。更に、嘉禾吏民田家蒞の各郷の標題簡と対応する郷の木簡との間で背の高さが一致することを示し、各木簡の属する郷の推定結果の妥当性を保証する一つの材料とした。

第三章では、嘉禾吏民田家蒞の作成主体について論じた。まず、嘉禾吏民田家蒞では複数郷の木簡が記載された文言のパターンを共有する場合があることを根拠に、嘉禾吏民田家蒞の作成主体は郷吏ではなく県吏だと述べた。続いて、嘉禾吏民田家蒞の作成主体である県吏の具体的な官職を検討した。そこでは、嘉禾吏民田家蒞は一郷、あるいは、複数郷を単位として記載された文言のパターンが異なっていること、そして、長沙走馬楼呉簡に見られる勸農掾という官職は一郷、あるいは、複数郷を単位として業務を分担していることに着目し、嘉禾吏民田家蒞の作成主体の官職は勸農掾だと述べた。

嘉禾吏民田家蒞の作成主体は県吏であり、その具体的な官職

は勸農掾である。以上が嘉禾吏民田家蒞の作成主体に関する本論文の結論である。

## 〔西洋史学専攻〕

### 一五六六年のアムステルダムにおける

#### ペールデンストルム

—聖画像破壊運動に関する一考察—

上田 悠貴

一五六六年の夏、ハプスブルク家治下のネーデルランド各地で生じた、「ペールデンストルム」(蘭: Beeldenstorm、直訳すると「画像の嵐」)は、改革派(カルヴァン派)牧師らの説教に影響を受けた人々の手で引き起こされた聖画像破壊運動である。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペ二世は、異端者の処罰を強化し、逆にこれに反発したオランジェ公ウイレムらによる「反乱」が生じた。このようにペールデンストルムは、宗教史的にも政治史的にも、ネーデルランドの歴史における重要な転換点となった。

ペールデンストルム全般については豊富な研究の蓄積があるが、その多くはアントウェルペンなど、比較的被害が甚大であったネーデルランド南部の都市の事例を取り上げていた。一方、ホラント州をはじめとする北部での破壊活動には、焦点が当た

ることは多くなかった。本研究は、そうした都市の一つ、アムステルダムでのペールデンストルムを扱い、その背景について考察している。その結果、二つの大きな要素が浮き彫りになった。

まずアムステルダムを含むホラント州の諸都市では、中世後期から聖職者や修道士が有していた諸特権への反感が、市民の間で醸成されていた。こうしたいわゆる「反教権主義」は、元は聖職者たちの墮落や悪弊を批判するものであった。しかるにアムステルダムでは市内の修道院の急増とともに、次第に彼らのもつ免税特権と、それに伴う市民の経済的負担の増大により、その敵意はさらに膨れ上がっていた。ペールデンストルムが生じる直前に、改革派説教師が行った「野外説教」でも、カトリック聖職者たちは厳しい批判の対象となった。教会や修道院の破壊行為も、こうした心性の現れであったことを示した。

これに加え、暴動発生時における市当局の無策も、事態の悪化を生んだ要因であった点を指摘した。当時のアムステルダム市当局は、異端者への厳罰を支持する厳格なカトリック市民が、要職の多くを占めていた。彼らの進める宗教面・経済面での諸政策は、かねて多くの市民の反感を買ひ、また市内の治安維持を担う市民軍も敵に回っていた。ペールデンストルムに際し、市当局は破壊行動を抑えるために市民軍の協力を要請するも、拒否された。また改革派の指導者との和解交渉では、彼らは穏健な改革派の有力市民の仲介を必要とした。このように市当局はその求心力を著しく欠き、アムステルダムはハプスブルク政

府による介入を受けて、ようやく改革派の勢いを鎮めるのであった。

### 一九世紀末イギリスの自由主義と

#### 「ウェールズ・ナショナルリズム」

——一八八六〜九六年の「ウェールズ土地問題」をめぐる議論を中心に——

佐藤 まゆ子

本論文は、急進的自由主義者およびウェールズの非国教徒の知識人が担った一九世紀末の「ウェールズ・ナショナルリズム」を考察するものである。研究では、第一にウェールズ民族主義者がアイルランド土地問題をモデルに創り出した「ウェールズ土地問題」をめぐる議論のあり方、第二にウェールズとイングランド及びイギリス帝国との関係が「ウェールズ・ナショナルリズム」形成に及ぼした影響の分析を試みた。

本論文は、自由主義と結びついて出現した「ウェールズ・ナショナルリズム」を肯定的に評価する先行研究を批判的に再検討することを目的に、ウェールズの民族主義団体カムリ・ウィーンズが発行する同名の機関誌を史料とし、自由党議員を中心とするウェールズ民族主義者による土地問題に関する言説に分析を加えた。

「ウェールズ土地問題」は、一九世紀後半の経済発展を受け

て台頭したミドル・クラスによって旧来の支配層である地主階級打破のために創造された側面が強かった。「土地問題」に関する言説の中では、言語・宗教・政治的志向が借地人と異なる地主が「イングランド化」した存在として描かれるなど、階級の分断が民族的分断に置き換えられた記述が多く見られ、「ウェールズ・ナショナルリズム」は自由党が大衆の支持を得るための政治的手段として用いられた。また、ウェールズとアイルランドの農村部の状況、両地域それぞれのイングランド及びイギリス帝国との関係の違いによって、両者の土地問題やナショナルリズムの性質は大きく異なっていた。ウェールズでは、民族主義者が展開した「土地問題」観や「ウェールズ・ナショナルリズム」的行動はアイルランドのように社会から広汎に支持されることなく挫折した。土地問題を推進した民族主義者の政治的目的や大衆の熱狂的支持の不在を考えれば、一九世紀末の自由主義と結びついた「ウェールズ・ナショナルリズム」の成果は限定的であったと考えられる。一方、機関誌の記事中に見られるように、ウェールズ民族主義者はイングランドとの合同続行を前提とし、帝国意識は社会に広く共有されていた。このため、一九世紀末の「ウェールズ・ナショナルリズム」は帝国意識を基盤としていたと考えられる。

## 一六世紀のギリシア語刊本における

ネットワークが果たした意義について

—アルド・マヌーツィオの事例から—

菅原 真帆

西欧中世ではギリシア古典の多くが失われ、古典ギリシア語はながらく理解されなくなっていた。だが一二世紀頃からアリストテレスをはじめとするギリシア古典の価値は次第に再評価されるようになり、一五世紀末になると、新たに考案された活版印刷によって、それらをより広い読者層に広めようとする機運が高まっていた。

本修士論文は、ギリシア語作品刊行の先駆者としてギリシア古典復活に大きく貢献したヴェネツィアの出版者アルド・マヌーツィオ（一四五二頃—一五一五）の活動を取り上げ、彼の功績の一つとして知られるギリシア語作品出版のプロセスと背景を説明することを目的とする。研究方法としては、マヌーツィオ自身が記し、N. G. Wilson, *Aldus Manutius The Greek Classics* (Harvard University Press, 2016) に採録された序文を分析することを採用した。マヌーツィオは一印刷者であり、まとまった著作は残してはいないものの、出版するすべての作品において、名宛人へ序文を書き、その意図や編集事情などについてほめかしているからである。

当時マヌーツィオは、ギリシア古典刊行にはじょうに意義があり、ビジネスとしても有望であると考えていたが、彼一人の力で、主要なすべての作家やその他数多くのギリシア語刊本を出版することはできず、助力が必要であった。そのためマヌーツィオは彼の周囲に多彩な人材を集めたが、彼らはトッレザーニのように印刷技術に貢献し、あるいはマヌーツィオの教え子であるカルビ領主アルベルト・ピオのように資金調達に助力するだけでなく、クレタ島出身のムスルスのように校正者や編集者というかたちで実務に携わり、様々な面で彼を支えた。

さらに、ピエトロ・ベンボのようなヴェネツィア人だけでなく、エラスムスやトマス・リネカーのようにヨーロッパ各地から集まった学生や学者たちがギリシア語文献の印刷・出版について議論し、出版する作品の底本となる写本の入手や校訂、販売など様々な面においても貢献した。これらの多様な人々は人的ネットワークを形成し、マヌーツィオが創設した「ネアカデミア」の活動に参加した。マヌーツィオが遺した序文のいくつかには「文字の共和国 *res publicae litteralis*」という表現が見出されるが、彼の「ネアカデミア」は近世における「自発的社団 *voluntary society*」の先駆けとも見なすことができ、その力によってマヌーツィオはギリシア語文献を刊行することができたと結論した。

〔民族学考古学専攻〕

後期旧石器時代前半期における

石斧石材の選択と利用

—透閃石岩製石斧出土遺跡を中心に—

鈴木 伸太郎

日本列島の後期旧石器時代前半期を特徴付ける石器である石斧は、使用される石材の特殊性故に、同時期の他の器種とは異なるライフサイクルを持つことが指摘されてきた。そうした中で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を用いた石斧が、他石材製の石斧と比して、特に広範囲に分布する事が明らかにされ、そのライフサイクルの特殊性が注目を集めている。そこで本稿では、透閃石岩の物性を明らかにし、他石材と比較することにより、同石材製の石斧が広域に分布するに至った背景の一端を論ずることを研究の目的とした。

透閃石岩製石斧が出土している後期旧石器時代前半期の43遺跡・地点を対象に、帰属時期を出土層位・器種組成により前葉、後葉の2期に、立地を透閃石岩原産地からの距離に基づき3つのエリアに大別した。その上で、既存の岩石学の書籍やデータベースの情報を参照し、特に道具としての石材の「強度」と密接にかかわる各種石材の「密度」について時空間的比較を試みた。

その結果、前葉、後葉の2期を通じ、透閃石岩製石斧の原産地である青海蓮華地域から概ね一〇〇km圏内までは、透閃石岩が好んで選択されるとともに、同原産地に産しかつ同等の「密度」をもつ緑色岩などの石材も石斧石材として好んで利用されることも確認した。一方、前葉のみ分布する一〇〇km以遠のエリアのうち、二〇〇km圏内では、透閃石岩の補完石材として、透閃石岩よりも「密度」が劣る在地石材が利用される姿も確認し、その傾向は二〇〇km以上の遠隔地においてはより顕著となることも明らかにした。上記の事実は、透閃石岩製石斧の石材選択に「強度」が重視され、透閃石岩が広域に分布した要因の一つとして、その「強度」が求められた可能性も示唆している。本稿においては、石斧製作に用いられた石材について、岩石種ごとに既存のデータを用いて検討を行なったが、同じ岩石種として分類される場合であっても産地、あるいは採取場所によってその性質には差異がある。今後、遺跡出土資料の非破壊分析、あるいは産地、諸特徴が一致する石材のサンプルを用いた破壊分析などを実施し、より精緻な検討を行う必要がある。

古代出羽国南部における郡内支配の様相

—官衙関連遺跡の分布・立地の検討を中心に—

後藤 千遥

古代東北史研究は、これまで城柵を軸にした領域拡大のプロ

セスに主眼が置かれてきたが、陸奥国と出羽国では、それぞれの成立過程や在地の勢力との関係に差異があるため、同じ文脈に乗せて論じることが困難である。創建当初の出羽国に組み込まれた置賜郡・最上郡では、これまで典型的な郡家遺跡が発見されておらず、部分的な官衙的要素からなる官衙関連遺跡と称される遺跡が、郡内に分散していることが明らかになっている。本論では、こうした官衙関連遺跡を対象に、両郡における郡内支配の特性とその変化について明らかにすることを目的とする。

具体的には、飛鳥・奈良・平安時代（7世紀後半～10世紀初頭）に形成された官衙関連遺跡を抽出し、周辺の一般集落遺跡を含めて、それぞれの立地条件、時期的変遷を検討する。立地条件については主に傾斜区分図を用いて、遺跡と土地の傾斜との関係を捉えた。また、条里遺構分布図と重ね合わせることで、耕地との関係も分析した。そして、官衙関連遺跡を規模と構成要素に基づいて分類したうえで、官衙関連遺跡を中心とした郡内の遺跡分布の時間的変遷を明らかにした。

置賜郡では、郡成立時には盆地内の北、東、南に存在する扇状地に遺跡が分散する様相がみられ、8世紀末～9世紀前半にかけて、居住に適した南北の大きな扇状地にまとまる傾向がみられる。この時期に成立した官衙関連遺跡は河川交通に適した場所に位置しており、また河川に改修を加えている遺跡の例からも、河川を通じて郡内の物資運搬を行っていたと理解される。一方、最上郡では、官衙関連遺跡が、同様に盆地内の複数の扇状地上に存在するほか、盆地中央の扇状地前縁部から沖積低地

にも分布しており、置賜郡とは異なった傾向を示している。遺跡分布の時間的変遷をみると、8世紀末以降に沖積低地の官衙関連遺跡が形成されていることが明らかになった。

両郡内の遺跡分布と変遷には違いがみられるものの、一方でそれぞれの8世紀末～9世紀前半の様相は、ともに、郡内を一体的に支配するための要所に官衙施設を造営したものと考えられる。この時期は三十八年戦争と呼称される宝亀五年以降の蝦夷征討が行われていた頃にあたっており、官衙関連遺跡の分布にみられた変化は、出羽国の後方に位置する両郡でも、勅令に伴う物資・兵力の動きや交通路の変化の影響を受けて郡内支配体制が再編成されたことを示していると考えられる。

### 建築プロセスにおける煉瓦及びその積疊方法の選択

— 慶應義塾創立50年記念図書館を対象に —

井畝 良太

煉瓦の歴史学的研究は、一九九〇年代後半まで建築学の観点から主に進められてきたが、それ以降には考古学的研究の成果も増えてきている。ここでは、消費地で使用された煉瓦の分析に基づき、生産と流通を中心とした研究が進められている。一方では、施工をはじめとした煉瓦の消費といった観点を踏まえた研究は少ない。しかし、煉瓦構造物にみられる煉瓦の諸特徴からは、設計者、施工者、職人などさまざまな人々の建築への

関わり方を読み取れ、そうした視点からの煉瓦研究を行う必要がある。

本論文では、煉瓦構造物の煉瓦の在り方、つまりどのような煉瓦が用いられ、どのように積まれているのかという点に着目する。どのような立場の人々がどのように関与していたのかを明らかにすることを目的として、慶應義塾50年記念図書館を対象に、(1)文献史料と写真資料の分析、(2)煉瓦の諸特徴の考古学的分析という二つの方法から上記の点について検討を試みた。

(1)文献史料と写真資料の分析では、図書館史等の既存の文献史料に加え、日誌等の未公開の図書館建築関係資料(慶應義塾三田メディアセンター所蔵建築関係資料群)と、『慶應義塾50周年記念図書館建設経過写真帖』や『慶應義塾図書館アルバム』等の写真資料の内容を精査・整理することによって、図書館の建築プロセスを解き明かすことを目指した。その結果、施主の慶應義塾による依頼から竣工までの経過はもとより、煉瓦積の具体的な工程や、煉瓦の選択や積み方の選択に、煉瓦生産者、施工者、設計者の一人の曾禰達蔵が関与していたことを明らかにした。

(2)煉瓦の諸特徴の考古学的分析では、建築部位ごとに、煉瓦の法量の比較をはじめ、成形方法や積み痕、破損・加工煉瓦、個々の煉瓦の色調、刻印といった諸特徴の分布についての分析を行った。その結果、建築部位ごとに、煉瓦の種類や生産会社の選択、そしてそれらの積み方に違いがみられることが明らかになった。

二つの分析結果からは、設計者、施工者、職人の中で、煉瓦の選択、積み方の選択に対する意識がそれぞれ異なっていた点が指摘できた。そこからみえてきたのは、煉瓦と人との間の様々な関係である。

以上のように、本論文では、明治末期における構造物と、それを構成する建材、そして建設に関わるさまざまな人々の関係性の一端を解明できた。これは煉瓦の歴史学的研究、特に考古学的研究の新たな可能性を開くものと考えている。

とはいえ、煉瓦には、本論文で取り扱えなかった諸特徴があるだけでなく、他の煉瓦構造物との比較も実施できなかった。また、民俗学的な検討(煉瓦工場・設計会社等の聞き取り)等も今後の課題として残されている。

### 十字軍期エルサレム王国における農村運営

— 城館を中心とした農業集落の実態 —

藤田 隆太郎

11世紀末に南レヴァントに建設され、13世紀末まで存続した十字軍国家の研究では、ヨーロッパからやってきた「フランク人」と現地住民の間の対立を前提とする分離主義的解釈が長く主流であった。しかし、一九八〇年代以降、それを批判する議論が考古学的証拠に基づいて盛んになされるようになり、城館についても単に軍事的な性格だけでなく多面的な性格が明らか

かになった。現在の十字軍国家研究では、フランク人支配の寛容さや現地住民との境界線画定の議論に終始せず、とりわけ農村部において彼らの間にどのような関係性が結ばれていたのかわ明らかにすることが必要となっている。本論文は、12世紀中葉の比較的平和で農業活動が盛んに行われた期間の城館を中心とした農業集落を対象として、フランク人の活動に関する新視点の提示を試みた。成果として以下の三点を挙げる。

第一に、十字軍期の農村の実態解明に向けた道筋を提示した。重要な先行研究として、エレンブルムによる城館の後背地の農業的景観への着目があったが、考古学的証拠に不備があった。そこで筆者は、景観考古学的アプローチを取り入れつつ、発掘成果に基づいた遺物・遺構の分析を組み合わせることで、農業集落における活動を総合的に復元することの可能性を示した。また、その切り口として、農産物加工設備の領主の独占権を念頭に、主要な農作物である小麦やオリブ、ブドウの加工設備や道具の分析が有用であることを示した。

第二に、十字軍期に特殊な状況を考慮できるように、アプリアに議論されていた環境情報や農産物加工プロセスを整理した。12世紀の古気候の検討に基づく栽培作物の同定、ギブソンによって示されたエルサレム周辺地域の伝統的な農地システムの整理、農産物加工設備の型式学的検討を行った。

第三に、上記の方法を実現するケーススタディーとして、バイティン遺跡とベルモント遺跡を対象に農業集落における農産物加工を分析し、フランク人と現地住民の活動を考察した。

結果として、フランク人領主による農村経営は、城館の外に点在する水利施設や大規模な農業加工設備の整備を主導し、城館で収穫物の一部を徴収して貯蔵していた可能性が明らかになった。城館は領主の生活のための空間であることが確認され、家内制農産物加工の痕跡があることも同時に示した。

二〇二〇年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

近世の出版統制について

— 故きを温ねて新しきを知る —

イエズス会のインド—日本布教

— 地域認識からの一考察 —

「メセナ」の源流を探る

— 近代の企業家による文化・芸術支援の検討 —

リーダーシップ論から見た松下幸之助と稲盛和夫

ヤミ市再考

— 史料と文学作品から —

戦前期製菓業の経営者を取り巻く者たち

— 森永製菓・明治製菓を比較して —

全国清酒品評会の影響と役割

— 伏見酒造組合の活動を通して —

宝塚歌劇の優位性

— 松竹歌劇と比較して —

戦後における少女雑誌

— 『少女クラブ』『少女の友』を中心に —

文献資料に現れる葬儀に関する儀礼

— 男性聖霊と女性聖霊の葬祭の比較検討 —

軍事関係文書から考える鎌倉幕府滅亡

伊藤詩穂子

大谷 馨

橋本 裕平

浅田 大輝

井垣 莉保

大山 真輝

清水 悠

平松 里菜

山口ひかる

吉田 裕作

井村 浩輔

「悪人」としての松永久秀

『年中定例記』における故実と猿樂の武家奉公の実際

戦国期における年紀法の形態について

鎌倉寺院の仏事から見る頼経と北条氏の権力関係について

古代日本における男女それぞれのジェンダー観

律令成立期以降における医師についての検討

日本古代における歌垣と人妻の性関係

古代日本における水害対策の変遷

— 山川藪沢や国司・郡司との関係性を中心に —

『日本靈異記』の編纂と中国仏典説話の関係

古代日本における馬・牛の表象

戸田漕艇場建設と荒川治水

明治期御蔵島の経済構造と命令航路指定

一九〇〇—三〇年代日本の修学旅行と植民地

— 台湾と朝鮮・満州の比較を中心に —

明治・大正期の専門職の職業観と広告戦略

— 転居広告の分析 —

占領期閉鎖機関の分割再編

— 日本出版配給株式会社の事例 —

太平洋戦争下の広告業界

— 日本宣伝文化協会による統制 —

一九三二年東京市域拡張と上水道市営化

小澤 清佳

疋田 悠真

町田 勇樹

武藤 陸典

朝井 萌

高畑 長子

小林 太一

野部 絢子

本田 里菜

山下 京香

大島 亜希

小林 慶

小野 哲哉

山崎 哲哉

小野 嘉己

小林 英智

齋藤 航

— 玉川水道株式会社の事例 —  
都市中心部の鉄道忌避  
佐伯 翔

— 一八九〇年秋葉原貨物線敷設の事例 —  
民営期の勤工場経営と競争戦略  
漢口 雄琉

— 一九〇〇—一九一〇年代の帝国博品館 —  
一九七〇年代都市郊外の再開発と生活環境  
塚越 梨奈

— 春木競馬場の廃止と岸和田市 —  
戦後日本の企業経営とスポーツ  
戸嶋 隆介

— 日本サッカーリーグにおけるクラブと企業の関係 —  
朝鮮総督府の政策決定と植民地官僚  
那須諒太郎

— 大塚常三郎を事例に —  
一九九〇年代の郊外ターミナル駅周辺再開発と商業集積  
貫井 隆文

— 大宮駅の事例 —  
森高 駿

〔東洋史学専攻〕  
一九三〇年代上海の『申報』広告と消費者の「国貨」利用  
浅原 悠貴

— 愛国主義の世俗化という観点から —  
『旅行満洲』に見る郷土化への模索  
大塚 風紗

— 土産品の創出を通して —  
日中友好都市交流  
篠原 歩佳

— 神戸市と天津市を事例として —  
英領香港からみる民主化の歩み  
霜鳥 拓未

— 英領インド・英領マラヤとの比較 —

『中外日報』にみる中国人遺骨送還事業  
神中 隆慶

— ブルース・リー映画を中心に —  
湾岸諸国における国家と国民形成  
李 万迪

— 国籍法、外国人労働者、国土形成 —  
エジプト一月二五日革命における民衆運動と国民意識の  
変化  
向井 大樹

委任統治期パレスチナにおける女性をめぐる言説 — 近代  
性・ナシヨナリズム・フェミニズムの交差 —  
杉野 志保

— 慣習法集の分析をもとに —  
フランスが見たアルジェリア・カピール社会  
和田野 滯

— 一九六〇年代エジプト地方社会におけるミート・ガムル  
銀行の意義の再検討  
坂本七海子

軍を中心に見た一月二五日革命後のエジプトの政治変動  
田所 優卯

「イスラーム国」の広報戦略 — 機関誌におけるプロパガ  
ンダ要素分析を中心に —  
都築 章吾

漢初における郡国制の一考察  
丸山 莉穂

蚩尤神の性質について  
堀 佳亮

ガザリーにおけるスンナ派思想構築  
— 信仰の確信追求を中心に —  
宮田 駿

香料薬種商アッタルと中東の香り文化  
— 一四世紀アルハンブラ宮殿に見るイスラーム・スペイン  
の特質  
浦 華菜子  
飯島美乃里  
谷川真理愛

オスマン帝国治下の特権的商人—一八世紀後半から一九

世紀前半における対ヨーロッパ関係の変容— 中西 美穂

九—一世紀におけるシーア派少数派分派の教義及び死

生観の検討—宗教とは何か— 奈良 優香

ハンマームの信仰性と非信仰性 北條 弘樹

ティムール朝の宮廷書画院キターブハーナの実態と機能

松村 英奈

現代イスラーム世界における女子割礼文化

—自由主義社会との関係を中心に— 西村 穰

一六世紀初頭におけるコーヒーとコーヒーハウスの適法性

大塚 拓希

一四世紀アナトリア圏のイスラーム建築における幾何学

性について—ムカルナスを中心に— 山崎 拓己

中近世中東世界のペスト流行をめぐる解釈と困難

—医学、宗教、民衆、そして権力者— 加藤 舞

イスラーム世界における水に対する理念と一六世紀—一八

世紀イスタンブールの水路建築の関連性について 城戸 美乃

トプカプ宮殿のハレムで暮らす女性の在り方

—ヒュッレムの事例を中心に— 高田 葉希

クルアーンから見る女性

—イスラームは女性蔑視的な宗教か— 野沢 光希

フツガー通信にみるオスマン帝国一五八二年割礼祭にお

ける民衆のすがた 箕田 健人

トルコ絨毯からみるウシヤクとヘレケ、アナトリア農村

女性

横田 朱美

〔西洋史学専攻〕

ナポレオン一世支配下のスペイン・ナシヨナリズムの興隆

ジョン・A・フィッツシャーと二〇世紀におけるイギリス

海軍の改革 菊地 桃子

中世シチリア王国における宗教的寛容

—フレデリクス二世のムスリム強硬政策から— 藤井 和哉

一九世紀パリにおける「ファツション」という付加価値

の誕生—オートクチュールの祖シャルルフレデリッ

ク・ウォルトの事例から— 榎本 大雅

ジョン・ウィーヴァーのダンス論—“An Essay Towards

an History of Dancing”の解釈を中心に— 小澤 里佳

二〇世紀前半のアメリカにおける広告効果について

—ラッキーストライクの例から見て— 唐沢静里香

一九世紀イングランドにおける中世的建築の理想と現実

—A・W・N・ピュージンの事例から— 小西 智子

四—五世紀における教会著作家たちの皇帝観について

塩田 麻衣

一九世紀におけるドイツ観念論について—フォイエルバ

ツハの初期思想に見るヘーゲルからの変化— 轟 英美里

一九世紀前半のアメリカ合衆国におけるキリスト教観

—ジョン・クインシー・アダムスの事例から— 豊岡ぼおら

パリ・オペラ座の時代―オペラ座に見る一八世紀後半―

一九世紀フランス社会と劇場芸術の関わり― 西田 桜子

一八世紀後半―一九世紀におけるイギリスの日曜学校

三浦里佳子

ヤン・コラルルが思い描いたスラヴ民族の使命と新しい

文化的原則―著作『スラヴ民族の様々な種族と方言の

間にある文学的互恵関係をめぐって』より― 荒濤 理沙

フランス革命と女性権

渡邊小百合

第二次世界大戦後の西ドイツの経済発展とその要因に関

する考察―一九四〇年代―一九六〇年代を中心に―

岩野 未弓

近現代フランスのモード史におけるオートクチュール

の誕生から衰退まで 大平 佳奈

トーマス・ミュンツァーの思想と社会変革

城基 俊

ナポレオン戦争期から三月前期にかけてのドイツ愛国運

動におけるブルシェンシャフトの意義 芹沢 幸輝

ハプスブルク家の勃興から初期繁栄

―ルドルフ一世からマクシミリアン一世まで― 高瀬英梨花

中近世フランスの魔女狩りの特徴と現代に通じる思想的

背景 竹井 夢子

フランス革命とマリー・アントワネットの処刑 宮崎日菜子

ビスマルク体制下(一八六二―一八九〇年)におけるド

イツの外交政策 吉村真由子

帝政前期ガリアにおけるブドウ栽培

―栽培地の北上の年代について―

コンスタンティヌス帝の初期プロバガンダ 藤木 繭子

―コンスタンティヌスの凱旋門を通して―

アリスタンドロスの歴史的意義 小林 美織

―アレクサンドロスを支えた偉大な古い師―

古代ローマにおける剣闘士競技の意味 川島 優太

―兵士にもたらした勇敢さ―

古バビロニア時代におけるビジネス形態に関する再考 竹田 義人

―動産賃貸と交換経済に着目して―

アウグストゥスの個人的考えから読み解く食糧供給の意図 陳 柏霖

古代ローマ帝政期における持参金に関する考察 中島 孝輔

―妻の死後の取り扱いを中心に―

フェニキア期西地中海におけるイビサ島の航海上の役割 中山さくら

ベトナム反戦運動とメディアの役割 山田 秀

ナチス政権下(一九三三―一九四五年)における旧博物 井上 栞

館 (Altes Museum) 井村 友香

フランコ体制下のスペイン観光業におけるパラドールの 小林 奏

役割

一八世紀イタリア都市における慈善と女性

―フィレンツェ・トリノの事例から― 坂田はな花

マリ・パップリカルパンティエ(一八一五―一八七八)

が目指した「保育学校」(cole maternelle)における

低年齢教育—教育観とその背景にある幼少期の経験

佐藤 佑衣

一九世紀後半から二〇世紀前半におけるニューヨークの

鉄道の発展、および人口移動 照沼 大河

一九二〇年代アメリカにおけるアイボリー石鹼の広告と

衛生観 根岸 達生

一九世紀末のイングランドにおけるラグビーはアマチュ

アリズムを真に崇拝したか—ラグビーの分裂や「エリ

ス神話」の創造を手がかりとして— 袴谷 優介

一九八〇年代フランスにおける郊外と、「ブルル文学」

に見る移民 星 和希

ルーシの信仰 —イブン・ファドラーンの『報告書』から— 北原 祥乃

ノルマン・コンクエスト後から一二世紀における、イン

グランドの城 白土 耕平

Functions of Mele during the colonization of Hawaii

佐伯 南美

英国競馬に見る上流階級と労働者階級間の壁の変化

嶋田 慎也

聖俗両方の視点から見たヒューバート・ウォルターとい

う人物について 武田 仁志

産業革命期イングランドにおける犯罪の傾向について

新谷 那々

オスマン帝国統治下におけるイスラームへの強制改宗に

ついて

—一五—一九世紀のバルカン地域— 北條 円久

農民から見るイギリス封建制の崩壊と、社会階層への影響

大高 千奈

ノルマン人と城砦建築—ノルマン・コンクエストがイン

グランドに与えた影響— 富永 航大

プレクジットの理由についての考察 山本 武留

〔民族学考古学専攻〕

弥生時代中期北部九州の社会構造

—甕棺墓制を中心に— 寺村 美南

日本におけるサキソフオンの変遷

—製造と演奏の面からの考察— 中村 怜央

関東近世女性人骨における耳状面前溝発達度

—古人口学の手法と江戸市中人口を踏まえて— 中村 謙伸

第一次テトラルキア期の四帝たち…ラテン語碑文の称号

に見るその関係性 山崎 雅

アッシリア帝国期の彫刻壁画における宦官

—ニネヴェ北宮殿出土の彫刻壁画を対象に— 佐藤エレナC

西荻の特長

—街並み変遷の分析をもとに— 中村 真彰

マロン派典礼改革に見られる伝統観

ニュージールランドのワンガヌイ川に関する研究 森 美月

—テ・アワ・トゥプア法の事例から— 高田 美貴

接触領域としてのケ・ブランリ

―展示活動の歴史研究から―

国立大学町における郊外住宅地の形成

造形物から見るソロモン諸島

多摩川の歴史に関する研究

アポリジナル・アートの文化資本化

―エミリー・ウングワレーを例として―

TMT建設抗議運動から紐解くネイティブ・ハワイアン

のアイデンティティの再構築

『モアナと伝説の海』からみるポリネシアの文化英雄マ

ウイ

日本で生きるトンガ王国出身ラグビー選手

日本におけるアーユルヴェーダの受容と実態

古代畿内、南河内地域における水利施設の運用

縄文時代の仮面遺物について

一四・一五世紀武蔵における板碑生産工房に関する考古

学的研究―種子・蓮座・花瓶表現に着目して―

近世埋葬遺構出土の櫛に関する考古学的研究

―使用方法の性差を中心に―

立山の山岳信仰遺跡と立山曼荼羅の研究

田中 祐壮

池 拓樹

宇尾野莉那

小倉 孝太

京墓 歩惟

下田明日香

鶴井 彩央

原田有里子

本橋 怜子

中田 明花

吉川 怜里

小山 堅登

杉本 佳実

横川 正明